
死と隣り合わせの...

燐光蘭歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死と隣り合わせの…

【Nコード】

N4174G

【作者名】

燐洸蘭歌

【あらすじ】

銀誓館学園に通う『能力者』の4人。ゴースト退治のために行くことになったのは、銀魂の世界！？異世界で起こったことに疑問を感じるもののいつも通り退治へと向かう。けれど、それはこれから起こる悲劇の始まりに過ぎず…。銀魂、シルバレーン、そしてあるゲームのどたばた二次小説です。シルバレーンは実際のゲームからかなり外れたところを走ると思います。設定等の同じ別物とを考えてください。また、極度の似非キャラが大勢居るかと思っていますのでお気をつけください。

ブログ（シルバーレイン側）（前書き）

シルバーレインについてですが、トミーウォーカー社運営のPBW（プレイバイウェブ）です。

詳しいことは『<http://t-walker.jp/sr/>』へ。

同じ（ような）名前の生徒が実際のゲームに居ても、プレイヤーは私ですの…

ブローグ（シルバーレイン側）

放課後の教室。そこに居るのは4人の能力者と1人の運命予報士。

呼び出し申し訳ない。実は此処とは全く違った場所でゴーストが連続で現れるんだ。

と運命予報士はそう切り出した。

「君たちにはとある漫画の世界でゴースト退治をしてきてほしいんだ。暫くその世界に滞在して貰う事になると思うけど」

そこまで予報士が言ったとき漆黒の髪少年が手を上げ

「質問。どうやってそこへ行くんだ？漫画の世界に行くことはほぼ不可能だと思うけど」

そう聞いた。

「それについては気にしなくても大丈夫。シルバーレインによって生み出された特殊なトンネルが現れていてね。ちょうど仁奈森キャンパスの屋上なんだ。ちなみにそれを見つけたのは屋上に居る確率の高い彼だよ。学園のほうで色々と手を打って君たちの行く場所のトップとも話をつけたそうだよ。世界結界については気にしなくても平気だ。向こうは世界結界で守られていること以上のこともあるみたいだから」

そういうと、予報士は一冊の漫画をすつと机の上においた。
4人の少年少女が身を乗り出し覗き込む。

「あ、これ、雪鬼のおにーちゃんが読んでた」

「私も。前に読んだよ。アニメも見たことある」

雪のように白い髪 of 少年と白銀の髪 of 少女がそう言った。

「お二人さんは？」

「持つてるよ。単行本全部」

「前に読んだ覚えがある」

先ほど質問をした少年と、黒髪の少女もそう答えた。

「なら、これについての説明は不要だね。僕からの説明は以上だよ」

「ちょ、ちょっと待った！ゴーストの特徴とか聞いてねえぞ！」

「あ！ごめん。忘れてた！」

黒髪の少女に言われ、しまったと天を仰ぐ予報士

「忘れないでよう」

目を見開いて白い髪の少年が言った

「ごめんごめん。行つてすぐ、君たちが倒さなければいけないのはリスだよ。でも、それで終わりじゃないんだ。さっき言った様に、まだまだ居るだろうから。それについては、なんともいえない」

「その後はどうするの?」

「一応、対策としてこれ。学園と向こうとで作ったものらしいんだけど。こつちとあつちで通信が出来るらしいよ。三方原君、持っていてくれる?」

「了解」

投げられた携帯のようなものを漆黒の髪の少年はキャッチした。

「リリースについては夜、繁華街で客引きのふりをして呼び止めた人を脇道に連れ込むみたい。それと、能力者の居る方向が大体わかるから気をつけて。」

4人がいつせいに頷く。

それを見て、予報士は一度にこりと笑った後、すぐに表情を引き締める。

「じゃ、ほんとにこれで以上だよ。行つてらっしゃい。気をつけて。無事に戻ってくることを祈ってるから」

「行つてきます」

「いつてきまあす」

無言で教室を出て行く、黒髪の少年と少女。にこりと笑いそう言うてから教室を出る白銀の髪の少女と白い髪の少年。

死と隣り合わせの青春を

ブローグ（シルバレーン側）（後書き）

今後登場予定のシルバレーンの面々（自キャラを基にしたオリジナル）の設定は

`http://mozinoraretu.web.fc2.com/sr/tonari.htm`

にまとめてあります。

ブローグ（銀魂側）（前書き）

むしろ、真選組側ですね。
どうも、口調が怪しいです。
もう少し勉強しなければ…
つか、沖田の口調は難しい

プロローグ（銀魂側）

「これは酷いな」

江戸かぶき町。夜になるとにぎやかになる繁華街から少し離れたところで出勤した真選組隊士たちは顔をしかめた。

彼らの前には衣服の切れ端と片方だけの靴。そして大きな赤い水溜り。

「また死体がありやせんぜ。こんだけの出血、まず生きている訳無いでさア」

「これで3件目か。全く何が起こつてやがるんだ？」

その場に居る真選組隊士の中でもっとも若年と思われる青年が言えば、タバコを加えたままの男はそう返した。

と、パトカーの中の無線になる。一人の隊士が無線に出るため、パトカーへと向かう。

その間、ほかの隊士は周りに少しでも証拠が無いか探している。

「副長、代わってくれつて局長から」

「あん？…なんすか？近藤さん」

どうやら、タバコを加えた男がこの中では一番上の地位に当たらしい。確かに、彼と若年の青年だけは制服が違ふ。

『用件の前にひとつ聞きたいんだが、またか？』

「ええ。また大きな血溜りはあるが死体が無いつてやつですよ」

『そうか。悪いがすぐに戻ってきてくれ。それに関連する事を松平のつつアさんから聞いたんでな』

「わかりました。こつちもほかに何も出て来そうも無いんで、引き上げます」

『悪いな』

「引き上げですかイ？」

副長と呼ばれた男が無線をきくと青年が側により、そう聞いた。

「ああ。話があるらしい」

「ふーん。…全員引き上げ！とつとと戻るぞ」

青年が声をかければ、隊士が撤収の準備を始める。

彼らがその場から撤収し、詰め所に戻りその内の一室に集まったのはそれから一時間後だった。

「…と言うわけで、どうやら今回のことには『人外』のものが関わっているらしい。それで、全く別の次元に住む人間がそれに対応すると言ってきたのでそいつらと協力しろ、との事だ」

隊士達の前に立ちそう言うのは、先ほどの無線で『局長』といわれていた男。

「質問ですけど、その銀誓館ぎんせいかんとか言う集団は何者なんです？」

「それについては詳しく教えてくれなかった。来た本人達に聞けと」
隊士の一人がそう聞けば男はそう返す。

「で、そいつらはいつくるんだ？」

「今日中には。とつつァんが連れて来る。連絡は以上だ。解散」

彼の一言で全員がばらばらと部屋から出て行く。

波乱の幕が開く

ブログ（銀魂側）（後書き）

今後も、真選組メインだと思います。銀魂は。次回、銀誓館学園のメンバーと真選組が合流の予定です。

時間がありましたら、感想を頂けると幸いです。

No.1(前書き)

本編です。

うーんやっぱり、銀魂キャラの口調が厳しいです

No.1

「準備は良いな」

漆黒の髪と目をした少年 みかたはらそつりゅう 三方原蒼竜、中3年 がそう問う。

「つつても、カードさえあればなんともなるからな。俺らは」

黒髪に赤目をサングラスで隠した少女 しもにしなるみ 下西成実、中2 がそう返す。

「確かにね。雪ちゃんも平気？」

白銀の髪にエメラルド色の目をした少女 「いづみ」 甲沢愁、中3 はすぐ横に居る少年に声をかけ

「うん。大丈夫だよ」

声をかけられた、雪のように純白の髪に深海のような目をした少年 いちめき 市目雪鬼、小3 は元気に返事をする。

彼らが居るのは少し傾いた太陽が射す になもり 仁奈森キャンパスの屋上。目の前では空間が少しゆがんでいる。

「じゃ、行こう」

4人が同時に歪んだ空間に足を踏み入れる。
一瞬グンと引つ張られる様な感覚を感じた後に彼らが居たのはすでに屋上ではなかった。

4人が立っていたのは川原。すぐ側には長屋が並び江戸時代のような感じだが少し先に目を移せば東京で見るようなビルが立ち並んでいる。

「実際に見てみると不思議だね」

「時間の流れ、違うみたいだな。どう見てもまだ正午過ぎってところか」

愁が感心したような声を上げ、成実は気づいたことを素直に口にす。雪兎は周りをきよろきよろと見渡し、蒼竜は無表情に予報士に渡された通信端末を見つめる。

「蒼竜お兄ちゃん、どうしたの？」

「ん…」

「お前ら、銀誓館の人間か？」

「ひゃっ」

「はい。そうです」

「やっぱりそうか。おじさん、待ってたよ」

彼らの側にやってきたのは、松平片栗虎。

愁の陰に隠れた雪兎の事を見つつも、蒼竜は返事を返す。

「驚かれないんですね。俺らの事を見て信用しないんじゃないかと

思っていたのに」

「お前たちのことを話してきた奴らが、来るのは餓鬼だろうって言うてたんだ。とりあえず、江戸に居る間は真選組のところで世話になっくれや。あいつらにはもう話はしてある」

「分かりました。ありがとうございます」

「案内してやるからついて来い」

そういえば松平は歩き始める。その後を4人は付いて行く。ちなみに、雪兎は愁の陰に隠れたままだ。

「しかし、お前らほんとに頼りになんのか？」

真選組屯所の一室で4人は局長の近藤勲、副長の土方十四郎と向かい合っていた。

ちなみに上の発言は、土方のものである。

「信用してくれないのも分かるけど…」

「でも、雪兎たちいろんな事やってきてるよ」

困ったように首をかしげる愁と、プクツと頬を膨らませる雪兎。成実と蒼竜については腕を組んで黙り込んだままだ。

「そういつても、お前ら全員10代前半だろう。しかもそいつにっいては10にも満たないじゃねえか」

土方が指差したのは雪兎。確かにこの中で一人だけ小学生だ。微妙な沈黙が両者の間に流れる。それを破ったのは

「なら、俺と手合わせして実力を知ってもらって言うことでどうだ？」

腕組みを解き真っ直ぐ土方を見つめる赤い瞳。

「おまっ本気で言ってるのか？」

「冗談で言えることじゃねえよ」

慌てて問う蒼竜。いつもと全く変わらない調子の成実。

「成実ちゃんだったっけ？それは無茶だと…」

「やる前から無茶だとは思わない」

近藤も止めるがばっさりと言い切った。

「そこまで自信があるなら、相手してやろっじゃねえか。その代わり、後で泣きを見てもしらねえぞ」

「あまり、甘く見ないでもらいたい」

睨みを利かせる土方と、すうっと目を細める成実。

「おい、トシ！」

「大丈夫ですよ近藤さん。少し実力を見せてもらっただけだ」

「なる、大丈夫なの？」

「ああ。大丈夫じゃなきゃ言わない」

「庭先でろ。そこで相手してやる」

No.1 (後書き)

とっつあの口調分かりません。意味不明です。

土方と成実は剣を交えることに!?

つーかそんなことしてる暇あるのか、という突っ込みは無しの方向で。

コメントお待ちしております。

No.2 (前書き)

果たして、土方と成実の勝負の行方は？
そして、銀誓館メンバー本格始動

No.2

庭で木刀を構える二人。いつの間にか数人の隊士たちも集まってきた見物人と化している。

「先に相手の額につけられた皿を割ったほうが勝ちだ。いいな」

「構わない。……蒼竜、俺のウエストポーチ投げてくれないか？」

土方の説明の後、くるりと蒼竜のほうを向きそういう成実

「へっ？なんで？…って重っ！何入ってんの？これ」

そう言いつつも思いつきり放り投げる蒼竜。

「砂袋などなど、計2k分ってところ」

紐の部分を掴み一度後ろに大きく振ってから質問に答える成実。

「何でそんなの…」

「訓練、つか普段二刀だから、バランス悪い」

中からいくつかの袋を取り出しウエストポーチを腰につけもう一度構える成実。

「馬鹿にすんじゃねえ！」

「冗談！これが無いとバランス悪いんで、ねっ！」

同時に交錯し木刀がバシリと音を立てる。そのまましばらく鏝迫り合い。間合いを取り再び木刀を繰り出す。

「土方さんと互角にやるとはねエ」

「副長、手抜きじゃないですよね」

「まさか、トシはそんな事しないさ。実際に彼女の力量が同じなんだろう」

どこか感心したように言うのは、一番隊隊長の沖田総悟、監察の山崎退、近藤。

「あれま」

「あーあ」

「はあ…」

一方、あきれたりため息を付いたりするのは、上から、愁、雪兎、蒼竜。

その間も二人は止まることなく、縦横無尽に動き回る。

「テメー何処で」

「なんだ？」

「そこまでの腕」

「
…」

「身に着けた？」

「生きていた世界の」

「あん？」

「流れだ」

互いに近づいては離れを繰り返しながらそんな会話をする。

「どんな世界だよ」

「そちらさんが取り締まる世界」

間合いを取る二人。正眼に構える土方。下段に構える成実。先に動いたのは成実。

左手を離し、切っ先を下に向け一気に間合いをつめるように走り出す。

ガリガリと木刀の先が地面を削る。

「甘すぎだ！」

「そのまま返す！」

「なっ！」

額の皿に向かって突き出された木刀が届く前に後ろへ跳び下がり、着地と同時に再び飛び上がり木刀を踏み台に二段目、更に土方の肩

を踏み台に三段目。

後ろに回りこみ木刀を繰り出す。

「せやつ！」

パリン

土方の額の皿が割れたと誰もが思った。が

「やっぱり甘かったのはテメーの方だったな」

「ですね」

割れたのは成実のほうだった。どこか不満げな顔の土方。目をそらし答える成実

「ま、テメーらの实力は分かった。認めてやるよ」

「…」

成実はペコリとお辞儀をして仲間のいるところまでさがる。

「やっぱり無理だった」

「うんうん」

「そう、だな」

「…成実」

愁と雪兎がやつぱりと頷く中、蒼竜は成実に小声でささやく。

「手、抜いたろ？」

「…ばれたか、やつぱり」

「何で手抜きしたんだ？成実はそんなことしなと思ったけど」

「まず、俺は昔ほど感情ばかりで動くわけじゃない。少しは考えて行動できるようになってる。それに、周りにほかの隊士が大勢居ただろう。あの場で俺が勝ったら、副長さんの立場といつかなんつか色々悪くなるかもしれないからさ」

「なるほどな…でも、だからって手抜きはどうかと思う」

「まあ、それは俺も思ったさ」

そんな会話のさなか、

「局長！またです！例の場所で今度は死体があるみたいですけど」

「なに！！トシ、総悟！至急、向かってくれ」

「オス！」

彼らとは少しはなれたところでそんな会話がなされる。それを聞いた4人はほぼ同時に近藤のほうを向く。

「近藤さん、それ俺らも付いて行っていていいですか？」

「構わないが…」

「俺らのやる事もあるんで。邪魔はしません」

「なら良いじゃないですかイ。邪魔したときは置いて来ればいいんでさア」

「ちょ、総悟、それほんとにやったら駄目だから!」

「愁と雪兎はここに残るんで、俺と成実だけ付いて行かせてください」

「ならさつさと来い。置いてくぞ」

さつさと歩き始める、土方と沖田。その後に蒼竜と成実が付いていく。

「蒼^{そう}ちゃん、気分悪くならない程度にね」

「!」

「分かつてる」

愁の声にピクリと沖田は少し反応するが、それに気づくこともなく蒼竜は返事をする。

No.2 (後書き)

次から、少し能力者について触れていこうと思います。
感想ありましたらよろしくお願いします

No.3 (前書き)

少々、雑になっている気がしなくもありませんが…

少しでも戦闘入ります。もっとも銀誓館メンバーですけど。

No. 3

「…」

「蒼竜お兄ちゃんと成実お姉ちゃん、行っちゃったね」

「だね」

縁側に座った愁の膝の上に雪兎が座っている。因みに、雪兎の頭の上に愁は顎を乗せている。

「ところで、何で二人残ったんだ？」

「ん…特に意味は無いんですけど、確認事項のためとここでなんかお手伝いできることがあればって事で蒼ちゃんが残るようになって」

横に座っている近藤が尋ねたことに愁は顔を向けて答える。

その間、愁の手は雪兎の髪を玩んでいる。

「そうか…と言うより、確認事項？」

「はい。あ、そろそろかな…雪ちゃん、ごめんちょっと降りて」

「うん」

「何をやってるんだ？」

膝から下りる雪兎と立ち上がり空中に手を伸ばして何かを書く愁。

「見えないんですよ？私は一部の人にだけ見える文字を書くことが出来るんで、ちょっとした実験を」

「実験？」

「はい。…これでよしと」

「逆に怒らせちゃわない？」

「ま、へーきでしょ」

「何がなんだか理解できないんだが…」

ニヤニヤと笑う愁と雪兎に対して、近藤は全く理解できず困り顔。

「説明すると、私は空中に『リリスのばーか』って書いたんです。リリスについては後ほどお教えますから」

「なるほど…確かに場合によっては怒らせるだろうな」

「にやはあ。あ、何か手伝えることありますか？暇なんで」

簡単な愁の説明に頷く近藤。愁の尋ねたことについては少し考えた後

「じゃあ、山崎と今まで使われてなかった部屋の片づけをしてくれるかな？君達にはその部屋を使ってもらおうと思っているから」

「わかりました。ところで、山崎さん何処にいるんですか？」

「…あそこでミントンやってる」

「…好きなんですネ、ミントン」

「特に、今トシが居ないからな…」

「雪兎、一緒にやってこよつと」

「あ、雪ちゃん」

近藤が示したところを見て思わずあきれれる愁、ピョコンと縁側から降りて走っていく雪兎。

「山崎のお兄ちゃん、一緒にやろつ」

「えっ？ああ、雪兎君か。良いよ、一人じゃ素振りしか出来ないから」

「やったあ！」

笑顔でいそいそとラケットを出し始める山崎、ニコニコしてピョンピョンと山崎の側を跳ねる雪兎。が、しかし

「じゃ無くって！近藤さんに今まで使われて無い部屋の片づけを一緒にするようにって言われたんで」

「あ、そうだったのか。じゃあ、先に終わらせようか。終わったら、一緒にやろつね」

「…うん」

愁に言われ、山崎は出しかけたもう一つのラケットを仕舞い雪鬼は膨れつつも同意する。

「片付けなきゃいけないのは、こっちだよ。行こう」

山崎が先に立ち、その部屋へと向かった。

「なあ、本当に行くのか？」

「はい？いまさら何言ってるんですか？」

「行かなきゃ意味が無いっての」

「まあ、それもそうだな……」

パトカーから降りる直前土方が二人に問い、蒼竜と成実はいさしポカ
ンとしつつも答える。

現場は余りにも悲惨だった。血溜りの中に内蔵がズタズタにされた
女性だった物が一つ。真選組隊士達が顔を背けたり眉をひそめる中、
成実と蒼竜は平然としたままそれに近づく。

「何してんてい」

「任せた」

「承知」

沖田の問いに答えず、ポケットに手を入れたまま蒼竜に言う成実と
じつと死体を見据える蒼竜。

蒼竜から出る不思議な気に真選組の面々は思わず一歩後ろへと下が
る。

次第に、彼の顔は青ざめ手が震え始める。

「やめて!!!!」

「おい！」

「蒼竜！」

彼らしくない甲高い声で叫んだ蒼竜に駆け寄る土方と腕を掴む成実。
と、死体が起き上がった。彼女はゆらりゆらりと近づいてくる。
隊士達に動揺と恐怖が走る。

「な、なんだ…」

駆け寄りかけた土方はその場で硬直し、

「じよ、『冗談きつ過ぎでさあ…』」

沖田はその場から更に三步下がった。

「蒼竜…」

「やることは一つだろーが！そこよりもっと下がってください！」

「何するつもりだ！」

「いーからとつとと下がれ！」

全員が下がりがきつたのを見ると二人はポケットからカードを取り出し掲げた。

『イグニッション！』

二人の声が見事にシンクロする。一瞬後に二人の服装が替わる

蒼竜はYシャツに長ズボン、マントを羽織った銀誓館学園の中等部制服、手には長槍を握り締め傍らには体長1mはある蜘蛛童^{くもわらし}。

成実^{なるみ}は黒く丈の長いコートに黒のブーツ、腰の両側には日本刀がー振りづつ。

「行く！」

「童！」

即座に地をけりコートの裾を翻しながら刀を抜くと間合いに入った女性の死体を斬り付ける。同時に蒼竜の側にいた蜘蛛童、童が猛毒を秘めた顎で噛み付き、蒼竜が長槍を振るう。

血が飛び散り成実の顔を染めた。
もう一度、成実が今度は闇を纏ったようなオーラとともに刀を振り上げる。

ドサリと死体が倒れる。

片手に刀をぶら下げたまま成実はそれを見下ろした。蒼竜も側へ行く。

少し二人で黙祷を捧げる。

「お疲れ様、童」

「…」

スツと童の背をなげる蒼竜、無言で刀を納める成実。
十秒ほど目を瞑り集中すれば、元の服装に戻る。

「テメーら、何を…」

「今のは、リビングゲットって言われてるゴーストの一種です。まあ、ゾンビとかと同じって考えてもらって大丈夫です。多分」

「あーゆうのを退治してやるのが『能力者』のやる事だ」

「因みに、もう襲い掛かってこないで安心してください」

土方の問いに、二人はそう答えた。

「後もういくつか」

「それは、戻って残った二人も合流してから説明します。それより、ここ調べるのが先じゃないですか？」

と言っても、何も出てこないと思いますけど…と蒼竜は付け足した。

「…死体については身元調べる！それ以外は撤収だ」

特にすることも無く、撤収作業を始める真選組。

「蒼竜、何見えた？」

「後でな」

「分かった。それより…」

「どうした？」

「ここだとこの格好目立つな」

「…そこか」

「いや、ほんとの事言っただけ」

「…やっぱり女なんだな、お前」

「それどー言うことだよ！」

その横でそんなことを話す二人だった。

No.3 (後書き)

愁と蒼竜のやったことについては次に説明します。

因みに、蒼竜のイグニッション後の格好は

『http://t-walker.jp/sr/html/world/world_035.htm』

の中学生冬服です。

次回

能力者について更に詳しく説明する銀誓館メンバー。

そして、なぞの事件解決の糸口はつかめるのか。

あくまで予定です。

感想等ありましたらよろしく願います。

No. 4 (前書き)

かなり長い上に読みにくいかもです。
シルバーレインについての説明が大半です。

No.4

「本題にたどり着くまで厳しいな」

「色々ありすぎるね…」

「何から話せば良いかな…」

「世界結界とシルバーレインについて知って貰わないと厳しいだろうな」

近藤と土方、各隊の隊長それに山崎。彼らと向かい合うように座り、学生四人は簡単な打ち合わせをする。

一応直ぐに打ち合わせは終わったみたいだが。

「決まったのか？」

「はい。まず世界結界とシルバーレインについて話しますね」

そう切り出したのは愁。四人の中では結構記憶力のいいほうだったりする。

「世界結界って言うのは、一人一人個人が『不思議なことなどない』と信じることによって形成されます」

この強力な思い込みは、目の前で不思議な事件が起こったとしても、それを認める事が無いほど強力です。彼らは、目の前で巨大な猪に人間が踏み潰されても『よくある交通事故』であると認識し、不思議な事など何も無かったと考えます。

(http://t-walker.jp/sr/html/world/world_02.htmより)

「つまり、今この場に巨大な猪が突っ込んできたとしても」

「湾曲して、『車が突っ込んできた』と解釈する」

土方の例えに成実は頷き答える。

「次にシルバーレインは、神秘の力を持つ詠唱銀が地上に降り注いだ光の雨の事です(http://t-walker.jp/sr/html/world/world_01.htmより)。えつと…あつた。これです」

首に提げた巾着から取り出したのはいくつかの小さな銀。普通の銀よりも光り輝いている。

「普通の銀にしか見えないんだがな…」

「まあ、そうなんですけどね…。詠唱銀が降り注ぐことによって、たまっていた残留思念が具現化して、ゴーストになるんです。ゴーストは人の命を脅かすものだから、そんな事が無いようにするのが私たち能力者の役目なんです。えと、これで一応私たちがここに来た理由に繋がる事は話したと思うんですけど…」

「まあ、さっきの話とあわせれば大まかには分かった。ついでだ、お前らの能力って奴についても教えてくれないか」

愁が心配そうに聞けば、近藤はそう答えた。

近藤に聞かれたことについては、少し顔を見合わせた後

「イグニッションするのが早いカ」

「うん。そうだね」

そう言い、四人はそれぞれカードを取り出し一度外へとでる。

「何やってんだ？」

「ま、色々理由はあるけどね…」

スツと、四人がカードを掲げる。

『イグニッション！』

四人の声がシンクロし一瞬後に全員の服装が変わっている。

雪兎は青い浴衣に右側頭部に狐の面、素足で手には青いヨーヨーを持っている。

愁は紅い袴の巫女姿で手には鉄扇。

蒼竜と成実については前頁にあるため割愛します。

「さっき俺らが持っていたのがイグニッションカードって言われるもので、普段学校で生活するのに能力者の持つ力は…なんていえば良いかな邪魔になるから詠唱兵器とかと一緒にこのカードに封じ込めておく」

イグニッションした場合、それまで装備していた普通の衣服などはカードに封じ込められ、イグニッションを解いた時に戻ってきます。
(<http://t-walker.jp/sr/html/>)

と蒼竜は説明した。

「で、俺らの能力だよな。俺は簡単に言えば自己の魂を武器と合一し、その『覚悟』と『意志』により強大な破壊力を生み出す闇の剣士【魔剣士】が本業つまりメイン。あと熱と光とを操る【ファイアフォッグス】がサブ。因みに本業能力っていうのがあって…」

そこまで言うつとスツと成実の姿が消え、再び同じ場所に現れる。

「魔剣士は闇纏いつつて能力の無い人の目や鏡、カメラに写らないようにすることが出来る。そんな所だな。普段戦う時に使うのは今は無理だな。危険すぎる」

「さっき、お前の刀に黒いオーラが付いたのもそうなのか？」

「ああ。あれも俺の使うアビリティ…能力の一つ」

土方の問いに成実は頷きながらそう答えた。

「私は聖なる光の波動を、自身の魂を媒介として行使する【ヘリオン】がメインで「土蜘蛛」の力を最大限に引き出す事ができる【土蜘蛛の巫女】がサブです。本業能力は、ヘリオンサイン。空に能力を持たない人と天体観測の器具に移らない文字を書くことが出来るんです。実際にやっても見えないだろうから…」

「さっき、やっていたのがそうなんだな」

「はい。一応まだ残ってますけどね」

「あれは挑発しすぎだ」

「えへへ」

近藤に尋ねられコクリとうなずく愁に蒼竜が突っ込みを入れる。

「雪兎はね、重力とか関係なく動ける【月のエアライダー】が本業で、己の内に秘めた「獣」の力を、自由自在に引き出して戦う【牙道忍者】がサブだよ。本業能力はエアライドって言っただけど、どんなに高い所から落ちてもたいした怪我をしないんだよ。だから…」

「童捕^{わらし}まえて、っーか引き戻して」

タツタツタと近くの木に向かう雪兎の腕に蜘蛛童の伸ばした糸が絡みつき引き戻す。

「雪ちゃん、駄目」

「何でだめなの？」

「心臓に良くない。以上」

プクリと膨れる雪兎の頭を愁が撫ぜ、成実はばっさりと断言する。

「で、俺は死者の魂に触れ異形の者を操る【霊媒士】がメインでサブの能力の変わりにコイツ、使役ゴーストの【蜘蛛童】を相棒にしている。俺は童って呼んでいるけど、ちゃんとおれのことを補佐してくれる」

「大きい…噛み付いたりとか」

「しませんよ。こいつは賢いから」

山崎の問いに、蒼竜は童の背を撫ぜつつ少し笑みを浮かべて答えた。

「本業能力は断末魔の瞳って言うてゴーストに人が殺された場所で、ゴーストに殺された人間の最期を被害者の視点で見ることが出来る」

「さっき蒼竜がやっていたのはそれなのかい？」

「そつ。さすがに気分悪くなったけれども」

「何を見たんだ？」

「まあ、その前にゴーストの種類説明しないと理解してもらえないだろうから。ゴーストにはいくつかの種類があるんです」

強い怨念を残して死んだ生物の残留思念が、シルバーレインの影響によってゴーストとなった地縛霊。

多数の動物の残留思念が寄り集まり、シルバーレインの力を得てゴーストとなった妖獣。

肉体を持つゴーストで、動く死体ともいえる存在のリビングデッド。激しい快楽と恍惚の内に死んだ女性の残留思念が、シルバーレインの力を得てゴースト化したリリス。

「特にリリスが一番厄介なんだよな。知能を持っている分色々策巡らして来る」

「ま、そこまで説明したところでさっき俺が見たものの説明します。あの女性はリリスによって殺されています」

少女の姿をしたリリースによってあの女性は殺された。

あの女性がリビングデットになった理由は不明。
と言う感じのことを蒼竜は手短かに説明した。

「つまり、俺らが捜査している事件はその、リリースとかリビングデットとか言うのが関わっているって事かイ」

「リビングデットです。まあ、簡単に言えばそうなります」

「簡単に言わなくてもそうとしか言いようが無いから。さてと、とりあえず解除するか」

沖田の言い間違いを訂正した後見事にボケた愁に蒼竜は速攻で突っ込みを入れる。横で雪兎が笑いをこらえる。

4人が同時に目を瞑る。10秒経てば、彼らの姿はイグニッション前のものに戻る。

「それでね、お願いしたいことがあるの」

「ん？なんだい？」

庭に下りていた全員が部屋に戻り座った後、雪兎は近藤にそういった。

「この事件、雪兎たちに任せてほしいの。その方がやり易いから」

「えっ…いや、それは」

「危ないのどうのこうのは無しで。これが日常だから」

近藤の言葉を途中で遮ったのは成実。彼女の目が先ほど土方と対峙した時のようにスウッと細くなる。

「そうであつても、それは出来ねえ相談だ。こつちにはこつちの義務やら色々あるんだ。そう簡単に餓鬼にすべて任せるなんて出来っこねえ」

「そうは言つてもこつちも一般の人を巻き込まないことが義務であり仕事なんで」

「……………」

「……………」

「……………」

「…なら俺らがそつちに協力つて事で。その代わり干渉しないほしい。それだつたら?」

「蒼竜!?!」

「それなら、まあ良いだろ」

「トシ!」

土方と蒼竜。長い沈黙の中でフウと息を吐き先に折れたのは蒼竜だった。

蒼竜の眉間には皺がよっている。土方は土方で苦い顔をしたままだ。

「仕方がない。それに、そうは言っても協力してもらわないといけないこともあるかもしれない。少なくとも、俺らはここに居候させてもらっわけだし」

「…蒼竜がそう言うなら従う」

「あいつらだけ危険な事させるわけじゃない。それなら良いだろう」

「そうだな」

双方、内部でも話は付く。

「で、そっちはなんかいい作戦でもあるのかイ？」

「正攻法。それだけ」

「地図、見せてもらえますか。この辺りの」

学生4人の表情が変わった。

No.4(後書き)

中に書いてある事のうち、本文内に記載が無い部分は

【http://t-walker.jp/sr/html/world/world|07.htm】(ジョブについて)
【http://t-walker.jp/sr/html/world/world|12.htm】(ゴーストについて)

を引用、参考にしています。

次回、真選組と銀誓館メンバーの共同戦線発動です。

No. 5 (前書き)

一 応協力体制をとることにしたものの…

「……って事は、誰か一人が近づく。そこで裏に行ったら残りが突撃だな」

「まあ、妥当な所だとそんな感じだね」

「それって妥当って言うより結構危ないんじゃないの？」

「近藤さん、今のこいつ等に何言っても無駄だ。聞いちゃいねえ」

成実が行動予定の大まかな纏めをして、愁が頷く。

近藤は至極真つ当な事を言うが誰も聞いていない。土方も近藤の横で煙草を吸いつつ眉間に皺がよっている。

先ほど協力体制といったものの殆ど子供たちが決めてしまっている。今ここに居るのは近藤と土方、子供達のみ。

各隊長達は既に居ない。山崎は冷めたお茶を下げるために出て行った。

「で、誰が囿になる」

「……」

「……」

「……」

蒼竜の一言に視線が集まるのは

「…もしかして、俺？」

「そう」

「うん」

「該当するのはお前だけだろ、蒼竜」

お決まりのように蒼竜。

「いやでもさ」

「言つとくけど、あれは男のほうに気が入るらしいし」

「雪兎じゃ、子供過ぎてだめでしょ」

「俺は女だし。それに身長等々考えて蒼竜なら未成年には見えないだろ」

「…了解。じゃ、後は特にやることは無いか」

溜息をつきつつパタンと後ろに倒れこむ蒼竜。米神に中指を当ててグリグリとやるのは何時もの癖。特に苛々している時の。

「おい、三方原」

「何ですか」

「困やるにしてもその格好じゃ目立つとかそう言う所考えないのか

「？」

「あ…って！」

土方に言われガバツと起き上がった蒼竜はポケットの中で鳴っている通信端末を取り出す。

学園側からの連絡を流し読みした蒼竜はまた溜息をつく。心なしか視線がさまよっている。

「えつと…蒼ちゃん、何があつたの？」

「良い知らせと悪い知らせ、どっちが先に聞きたい？」

「えつ…良い知らせかな」

視線を戻しそう聞けば、少し考えた後愁はそう答える。

「じゃ、そっちから。こつちでの服を万事屋に買つてもらえるよう頼んであるから取りに行けって」

「それって、良い知らせか？」

「もう一つのに比べれば十分良い知らせに感じると思うよ」

もっともなツツコミを入れた成実には蒼竜は苦笑いしつつ返す。

「万事屋ってあいつらか！！」

「それしかないと思いますけどね。あとで、場所教えてください」

「じゃあねえな…後で案内してやる」

「悪い知らせって何？」

溜息をつつく近藤と土方。それを見事にスルーして聞いたのは雪兎。

「テスト。期末テストがもうすぐ始まるってさ」

「えっ…それってもしかして」

「もしかしなくてもとんでもない点数だよ…」

ズドーンとテンションが下がる中学生組。雪兎それに近藤と土方はポカンとしている。

まあ、雪兎については小学生と言つこともありそこまで心配していないのかもしれない。

「でも、中学だから赤点でも進級できるでしょ。それにいくら疑身符が受けたと言つてもそこまでは悪くない。はず」

「そう思つところか。さてと、こんなところだな。愁、学園のぼうが頼んどいた服取りに行つて貰える？」

「蒼ちゃんは？」

「戦場確認。成実、付いてきてくれる？」

「分かった」

すっと立ち上がる蒼竜と成実。愁は座つたままグツと体を伸ばして

もう一度地図を覗く。雪兎はいつの間にか外に出ていて既にこの場に居ない。

「俺も行く。ガキだけで行って良いような所じゃねえ」

「えっ…それは」

「さっき協力つつったのはだれだ」

「…同行お願いします」

立ち上がった土方にそういわれて言い返せない蒼竜。はあと溜息をつきつつそういった。

「じゃあ、愁ちゃんは俺が案内するよ」

「ありがとうございます」

それぞれが行動を起こし始めた。

No. 5 (後書き)

次回あたり、やっと銀魂の主人公が出てきます。多分。
時間かかりすぎですね。主人公出てくるまで…

ちなみに、本文中に出てきた『疑身符』とは符術士というジョブの本業能力です。

感想、評価ありましたらお願いします。

No. 6 (前書き)

近藤に連れられて万事屋へ向かう愁。

土方とともに今夜の舞台を下見に行く蒼竜と成実。

ところで、雪兎はどうしたの？というのは最後に。

No. 6

「江戸の町って広いんですね」

「ああ。迂闊に近づかない方が良い所も多くある。そういう所だよ
ここは」

「東京と同じだなあ。当たり前だけど」

「東京？」

「私たちの世界での首都です」

「そうか」

無言で歩く二人。

「着いたぞ。ここだ」

「ありがとうございます。…すみません」

万事屋の入り口の前に立つ近藤と愁。
愁は扉を数回ノックする。

「はい…あれ？近藤さん。どうしたんですか？」

扉を開け出てきた志村新八は近藤のほうを見てそう尋ねた。

「やあ、新八君。用があるのは俺じゃなくって、こっちなんだけどな」

「あ、君？もしかして銀誓館学園の人？」

「はい。取りに来たんですけど…」

「うん。じゃあ上がってもらえるかな？確認してもらわないといけないから。近藤さんもどうぞ」

「お邪魔します」

そういつて、新八は二人を中に案内した。

「銀さん、お客さんですよ。何時までジャンプ読んでるんですか？」

「おう…って！何でゴリラがここにいの！客ってコイツの事！？」

「ゴリラは挨拶だな万事屋」

「違いますよ。こっちの女の子です。足降ろしてジャンプ下げれば分かります」

机の上に足を投げ出しジャンプを読んでいた坂田銀時は顔を上げて一番に目があった近藤のことを見てそういうが、新八に言われ足を

降ろしジャンプを少し下げる。

「あれ？そんなちっこいのが居たの？」

「ちっこいのはひどいです！！」

何とか愁の頭が見えてそういえば愁はむくれて言い返す。

確かに、184cmの近藤と166cmの新八が側に居ると146cmの彼女は小さくて目立たない。

「はいはい。で、何のよう？」

「銀誓館学園の人らしいです。あれ、何処ですか？」

「押入れの下の段」

銀時に言われ新八は押入れを開け風呂敷包みを取り出した。

「男物、女物4枚ずつで合計8枚。確認してもらっていいかな？」

「はい…確かに。ありがとうございます」

「うっん。これが仕事だし今回はそれなりの報酬を貰っているからね。家賃もしっかり返済できたし」

「ところで、ゴリラ。そのちっこいのは何なんだ？」

風呂敷を包みなおし愁に渡す新八の横でそう銀時は聞いた。

「それは機密だ。言えんな」

「そこらにいる子供じゃねえだろ」

「だから」

「答えられません」

ありがとうございます。そう言って愁は風呂敷包みを抱え近藤を引つ張り出て行く。
残されたのは新八と銀時。

「何言ってるんですか銀さん！怒らせちゃってますよ！」

「あの餓鬼はそこら辺に居る様な奴じゃねえ。そう思ったただけだ」

「確かに、餓鬼だけで来て良いような所じゃないな」

「ああ。少なくとも俺がいれば変な奴らもそう簡単に手出しはしねえ」

「さすがは、鬼の副長さんですね」

何が言いたいんだと言いつつ睨む土方を見ずに問題の路地へと入り込む成実と蒼竜。

「ちょっと狭いな。前後から挟撃しないと開いたほうから逃げられる。場合によっちゃあ上に逃げられるって事もありえる。どうする蒼竜」

「俺がリリスの前に回って足を止めさせる。そしたらリリスの後ろ

から成実たちが攻撃でとうだ?」

「…雪兎にビルから飛び降りさせてお前と並ばせるも言つのもありだな」

「ああ…其れがあつたか」

「おいおい、あのちっこいのをビルから飛び降りさせるつてのは殺すようなもんだぞ」

細い路地を行ったりきたりしながら話し合う二人に土方は口を挟む。

「さっきの話し聞いてました? 雪兎はどんな高さから落ちても怪我はしないんで問題は無いです」

「…そうだったな。だがな、ビルの中にどうやってはいる? 鍵掛かってるぞ」

「それは…元本業がいるから平気。な」

「…ちつ。しゃあねえな」

「犯罪行為でもするつもりなら、この場でしょっ引くぞ」

「…」

土方に言われて黙り込む二人。

「まあ、協力体制で了承したんだ。ちょっと付いて来い」

そう言つて土方は二人を連れて問題のビルの中へと入っていく。

10分後：

「ありがとうございます」

「どうせ夜もお前らだけで行くつもりだろ。なら、今のうちに頼んでおくしかねえだろうが」

ビルから出てきた蒼竜は隣に立つ土方にそういつて頭を下げる。土方がビルの管理人に頼み、明日まで外階段の鍵を貸してもらつ事を許可してもらつたのだ。

ほらよと、鍵を蒼竜に預ける土方。

「となると、雪兎に上から飛び降りさせて挟むか。愁にはあらかじめビルの外階段の陰に隠れさせて、雪兎も上に上らせておく。俺は奴に接触する直前までお前としてその後は裏道を通つて先回りをする。後ろを愁と雪兎、前を俺と蒼竜で挟むでいいか？」

「完璧」

「現場はもういいのか？それなら戻るぞ」

「はい」

そういつて3人は屯所への道をたどる。

1	1
5	5
1	0
!	!

「152!」

「153!」

「15 ああ！落としちゃった…」

「4本目は俺の勝ちだね」

しよぼんとする雪兎と少し嬉しげな山崎。
二人はバトミントンのラリーをしていた。ともに2本づつ勝っている。

「誰かとミントンやるのは久しぶりだよ。やっぱりミントンは誰かとやらないとね」

「雪兎もね、久しぶりにやったよ!」

「さてと、そろそろ夕飯の準備しなきゃいけないから、今日はこれぐらいにしよう」

「うん。夕ご飯の準備、雪兎も手伝う!」

「ほんと！助かるよ。じゃ、行こう」

雪兎の手を引き台所へと向かう山崎。
因みにミントンの道具は茂みに隠した。

ほかに比べゆつくりと過ごしていた二人だった。

No.6 (後書き)

なんか最後二人だけ場違いなのは、まあねって事で。
次回少々危険な描写も入るかと思います。

もしよろしければ感想お願いします。

もらえると更新スピードが上がるかもしれません

No. 7 (前書き)

やっと銀雨組の本格始動というところでしょうか？（キクナ）
成実が少々キヤラ違います。でも、そういう子です。

No. 7

「退お兄ちゃん、これどうすれば良い？」

「あ、じゃあそこにおいといて。其れと、鍋の中にその袋入れて貰えるかな？」

「うん」

台所では夕食の準備をする山崎の横で雪兎がチヨコチヨコと動き手伝いをしていた。

「あ、雪ちゃん此処に居たの？」

「愁お姉ちゃん！…それどうしたの？」

ひょこつと顔を出した愁は雪兎を見つけそう声をかける。
雪兎は雪兎で、愁の着ている着物に興味を示していた。

「ついさっき貰ってきたの。山崎さん、雪ちゃん借りていいですか？」

「大丈夫だよ。随分雪兎君には手伝ってもらったから」

「ありがとうございます。用事終わったら戻ってきますね。雪ちゃん、おいで」

「はあい。退お兄ちゃん、あとでね」

「うん。でも、急がなくていいからね」

雪兎の手を引き去っていく愁の背中に山崎はそう声をかけた。

「おい、成実、諦めろよ」

「わかってるよ。でも…」

既に着替えた蒼竜に言われつつも手に持った着物と睨めっこする成実。

なぜ彼女は睨めっこなどしているのか。理由は簡単。その着物の柄が花柄だということ。

何時も無地の黒い服を着ている成実にとって柄が入っている物を着るのに躊躇しているのだ。

「あれ？なる、まだ睨めっこしてたの？」

「分かってるってば！」

「じゃあ、さつさと着なよ。雪ちゃん、ちょっと」

ぱつぱと手際よく雪兎に着物を着せる愁。その間、成実は睨めっこを続けている。

「愁お姉ちゃん手際良いね」

「まあね。はい終わり。…なる、まだ決心しないの？即断即決のなるがめずらしい」

「…るせえ」

「愁、後は任せた。雪兎、行こう」

「うん！あ、でも、退お兄ちゃんの手伝い行かなきゃ」

「なら俺も行くよ」

そう言いながら、出て行く男子二人。残ったのは女子二人。

「着なきやだめ？」

「いやならいいけど、目立つよ」

「目立つのは嫌だ…でも」

「…なら強制だね」

「えっ！ちよっ！！」

「待たないからね！」

「きゃっ！」

「あっ！こら！」

らしくない悲鳴を上げ部屋から飛び出そうとする成実を愁はグイッと引き戻す。

「観念して」

「はい…」

シュンと小さくなる成実にも着物を着せていく愁。

食事中も騒がしい。

「土方さん、そのマヨの量、いい加減にしてくれませんかねい。見てて気味が悪過ぎでさあ」

「うるせな、今更遅い」

ご飯やら何やら、色々なものにたつぷりとマヨネーズをかける土方はつきり言つてあんまり見ていたいと思うものではない。まさかここまでやる奴は普通居ない。が

「魚は百億歩ぐらい譲つて良しとしても、マヨネーズかけるもんじやないでしょ！ご飯とか味噌汁とかは！」

「何時もこうだから今更言われても止められるか」

此処にもう一人。

土方ほどではないにしろ、色々なものにたつぷりとマヨネーズをかけるのは、色々なことから立ち直った成実。

「…此処にも居たか、マヨラーが」

「この二人、どういう味覚してんだ…」

思わずあきれる近藤と蒼竜。

特にそれ以外は問題（？）も起きず食べ終わり、食器を片付け。
そのまま山崎の手伝いをする雪兔。他の面々はこの後の動きの確認
を始める。

午後１１時

「やっぱりこの位からが賑やかだな」

「じゃあ、愁と雪兔は場所についてくれ。雪兔は合図をしたら愁の
横な」

「了解！」

「じゃ、先行くね」

行こう。そういつて鍵を握り締め走り去る愁と雪兎。
その後姿を見送り、

「俺らも行くか」

「あいよ。つーより後は任せた。既に奴はあそこに居るみたいだぜ」
目だけで場所を指示すれば成実は影をまとい姿を消す。そのまま成
実も移動する。

その場に残ったのは蒼竜のみ

「ねえ、お兄さん。暇なら来てほしいな。お客さん入らないと…」

「あ、ああ…」

声をかけてきたリリスに誘導されるように問題の路地へと向かう。
問題の路地へと差し掛かる。

「何処に行くんだ？」

「…お兄さん、頂きます」

蒼竜がさり気無く進路をふさぐように前に回れば、リリスは自らの
腕に絡み付いている蛇を伸ばす。

「イグニッション！」

即座に起動し^{イグニッション}長槍を振るう。

「あらっ？」

「成実、愁、雪兎！！」

「あいよ」

「待ってました！」

「よっと！着地成功っ！」

「図ったわね！！」

前後を挟まれ、ぎりぎりとは歯軋りをするリリス。してやったりと口元に笑みを浮かべる蒼竜。

「さあてと」

いきましょか！嬉々とした顔で地を蹴り黒影剣を叩き込む成実。それを受け止めたりリスに愁の放った光輝く槍が突き刺さる。

更に雪兎が三日月の軌跡を描く蹴りを叩き込むが、それはかわされてしまった。

「雪兎合わせろ！」

「うん！」

今度は蒼竜が槍の長さを生かして突きを繰り出すがあっさりかわされる。

そこにすかさず雪兎の蹴りが叩き込まれ、合わせたわけではないのだが愁の破魔矢が上手い具合に突き刺さる。

「鬱陶しい!!」

「っ!!」

「童!!」

「回復するね!!」

リリスの叫びとともに伸びた蛇は成実に噛み付いた。

それを蒼竜は長槍で突き刺しつつも童に指示を出し、愁は祖霊を成実に降ろす。

入れ替わり立ち代りリリスへと攻撃を与えていく。

リリスのほうからも攻撃は来るが、それぞれ自己回復若しくは愁の赦しの舞によって傷をふさいでいく。

「これで最後!!」

再び成実の刀がリリスを貫き、消滅させた。

「馬鹿ね…これから…」

「……………」

消滅の間際、リリスの口からそんな言葉が漏れるのを成実は聞いた気がした。

成実の目が細められ眉間に皺が寄る

「成実？戻るぞ」

「ん、ああ」

路地の出口には既にイグニッションを解いた3人が未だその場に立
ったままの成実のことを待っていた。

一度その場を振り返るも仲間の元へ合流し屯所への道をたどる。

No.7 (後書き)

今回は銀雨組に係る事件だったので、次あたりは真選組の予定
です。

が、予定は未定。

???
(前書き)

少し違う場所の話を。

???

薄暗い部屋。

3つのモニターが置かれ、その光だけが部屋を照らしている。

モニターのうち2つはどこかの町の様子を、残りの1つはローマ字と数字が規則的に並べられたものを映している。

その部屋の中には一人の男が居た。顔は逆光で見えない。

部屋のドアが開き、音も無く一人の青年がて入ってきた。

「あと二人、飛ばす方は準備整った。後はあんたの指示さえあればいつでも」

「ああ。すまぬな無理をさせた。こんなにも早く彼らが動くとは思っていなかった」

「いや。俺は別に構わない。薬物と機械は得意だから」

振り向かず言う男に青年は深くかぶった帽子の影から覗く口元に薄く笑みを浮かべそういった。

「それより、構わないのか？彼らのうち一人は貴殿の」

「あくまであいつは俺にとってただの実験台」

「ははは。貴殿も随分冷酷だな」

もつとも私もだろうがな。

笑みを浮かべたまま冷たい声で言い切る青年に男は笑い相変わらず落ち着いた声で言う。

「ところで、お願いがあります」

「おや？急に改まってどうした？貴殿らしくない」

「奴らの力を試しに行かせて貰いたいんだ。対策練るためにも」

「つまり、あのマンガの世界に行きたいと」

「ああ」

頼む。

深々と頭を下げる青年を見て男はしばし考えた後、

「貴殿が部下を総動員するなら私の目に付く。が貴殿一人なら目に付かないな」

そういった。

「行つて良いと…」

「そう言う事になるだろうな。まあ、報告はしっかりしてくれよ」

「わかりました。先に装置を？」

「いや、戻ってきてからで良い。しっかりと対策を立てられるようにしてくれ」

「了解」

「貴殿のことは頼りにしてるよ。小西鎧磨」

出て行く間際、鎧磨と呼ばれた青年の顔に掛かる帽子の影から覗いたのは血のように赤い眼だった。

??? (後書き)

読んでもわかるように実は、もう一作品含めようかと思っています。彼らは黒幕であつたり無かつたり。(どっちだ！)

ちなみに設定を急遽別の場所に移動したのには少し意味があつたり。彼の名前でそれを思いついた人、予想をどうぞ。

感想をいただけると励みになります。

No. 8 (前書き)

少しずつ事が動き始めます。

No. 8

翌日の明け方。

かぶき町の多くの人々が一番深い眠りに落ちる頃。

（何事だ…）

真選組屯所で仲間たちと寝ていた成実は屯所内の押し殺したような騒々しさに目が覚めた。

「隣はまだ寝てるか…」

原因を突き止める為、横に寝る愁を起こさないように布団から抜け出した成実は部屋を分ける衝立の向こうの気配を探る。

衝立の向こうの蒼竜と雪兎はまだ寝ているらしい。向こう側からは雪兎の小さな寝言と蒼竜の

呼吸音が聞こえてきた。

（確認するか）

成実は手早く普段通りの黒い服を着る。

そつと襖を開け足音を消し、廊下を昨日行つた大部屋へと歩いていく。

その行動に特に理由はないが、あそこが一番大きな部屋なら何かあればあそこに人が集まっているだろうと目星をつけた。

気難しい顔をしたまま大部屋から出た近藤と土方。
向かい側から成実が来たのを見て近藤は慌てて手に持っていた紙を
ポケットに突っ込んだ。

「何かあつたんですか？」

「起こしちゃったか？悪いな」

「別に餓鬼が気にするようなことじゃねえよ」

もっかい寝ろ。暗にそう言う。が

「…昨日の平時よりも微かに殺気が増えた。あいつ等は平気でも俺は無理だな。嫌でも体が反応する」

理由を教えて欲しい。

成実はスツと目を細めた。

「……何でそんな事が分かるんだ？能力者でいろんな所をくぐり抜けてきたのは分かった。だが、昨日までと大して変わらない。なぜ分かったんだ？」

「…さあ？何でだろうな？」

「てめえ、昨日言っただな？生きてきた場所がどうのこうのと。関係あるのか？」

「さあ？今はなんとも。ま、教えてもらえないならいいさ」

部屋戻って武器の手入れでもするさ。そう言うなり成実はクルリと踵を返して部屋へと歩いていく。

「なあ、近藤さん。やっぱり教えたほうがいいんじゃない？」

「まあ、そうだが今はまだ教えるべきじゃないと俺は思っただ」

こんなものが来たなんてな。

ズボンのポケットから引っ張り出した紙を再び握り締めた。

強く握り締めてくしゃくしゃの紙に書かれた言葉。
何とか読めるのは一言。

江戸全滅

No. 9 (前書き)

早朝の侵入者。

何者なのか？

成実は何か知っている？

No. 9

「氣にくわねえ」

部屋の前の廊下で柱に背を預けて座り目を閉じていた成実はそう呟いた。

「成実？起きてるのか？」

「起きてる。何だよ蒼竜」

「いや、早いなと思ってさ」

「おめえも十分早い。まだ4時過ぎだ」

「ああ。まだ、二人は寝てるしな。なんかあったのか？」

カリカリと人差し指で頭をかきつつ出てきた蒼竜は後ろ手に襖を閉めつつ小声で聞いた。

「何もな…伏せろ！！」

「！！」

成実に腕を引っ張られ床に激突しそうになった蒼竜の頭上を掠めて小振りのナイフが飛んでいく。
入れ替わるように立ち上がった成実は、何処からかナイフを取り出し飛んできた方向へ即座に投げる。

「誰だ!!」

「素早い判断。まだ変わらないみたいだな、成実。コードネーム『夜叉』」

「なっ!!」

ナイフを叩き落とし、現れたのは黒い服を身にまとい黒い帽子をかぶった青年。微かに覗く口元には薄い笑みが浮かべられている。

未だ床にしゃがみ込んだままの蒼竜の目の前には成実の手がある。その手が微かに震えているのを見て彼は驚かずにはいられなかった。

「何があつたの？」

「蒼ちゃん?なる?」

再び開いた襖の隙間から顔を出した雪兎と愁の寝ぼけた声に思わず成実と蒼竜は振り返って。

「隙ありつてな!!」

「っ!!」

成実の右腕に深々とナイフが突き刺さり、血が飛び散った。

「!土方さんたち呼んでくる!雪ちゃん!」

「はわわ?」

雪兎の腕を掴んだまま愁は慌てて駆け出す。ポカンとしたまま雪兎は引つ張られていった。

「蒼竜、お前もいけ」

「…はっ？」

「とっとと行け！ここは俺が片付けっから！！」

「…わかった」

二人を追いかけるように走っていく蒼竜。その場には成実と青年だけが残った。

「あの三人を巻き込みたくないのか？」

「…るせ」

「でもな、奴ら戻ってくるぜ。きっと」

「黙れ」

「少し奴らの命を延ばしてやったわけ？」

「だまれってんだ！！」

感情のままに声を荒げる成実。未だ口元に笑みを浮かべたままの青年。

「相変わらず短気だな」

「うるせえ!!」

床を蹴り走り出すと同時に腰の辺りから再びナイフを取り出す。そのまま青年へと突き出す。

青年はそれを手に持ったナイフで弾きあげ蹴りを放つ。

成実が飛び下がりに左の袖から先ほどよりも細いナイフを取り出す。

着地と同時に青年の胸をなぎ払う。それを一歩下がる事でよける。下がり際に再びナイフを弾き上げる。同時に右腕を振りまたナイフを取り出しまだ引かれていない腕へと突き刺す。

「っ!!」

「...」

初めて青年の口元に笑み以外の表情が浮かぶ。飛んだ血を見て成実は一気に冷静さを取り戻す。

「やつぱり、甘く見すぎてたか?なるほどね。これははつきりさせないと」

再び青年の口元に笑みが浮かぶ。さっきまでとは違う残忍な笑みが。

「...ふう」

一息を吐き出し、やはり口元に笑みを浮かべる成実。ゴーストを退治するときよりも残忍な笑みを。

愁と雪兎、蒼竜が何とか捕まえた近藤と土方、沖田と山崎をつれて
引き返してきたとき、地面には多くのナイフが突き刺さり、対峙す
る二人の体はお互いの血と自らの血で紅く染まっていた。

「ちえつ。こんだけ相手はさすがに難しいな。ま、良いか」

「逃げんじゃねえ!!」

クルリと踵でターンする青年に沖田のバズーカが放たれる。

「聞くわけないだろ」

その声を残して青年は消え、壁には穴があいた。

「なる、大丈夫？」

「…別に」

それだけ言うと、成実は突き刺さっているナイフを一つ一つ拾い、元の場所へと収めていく。

「あいつは何者なんだ？」

「…」

「成実の事、知ってたよな？」

「……」

「答える！」

近藤と蒼竜の問いを全て無視して拾い続ける成実に、土方が声を荒げる。

「……のだ」

「は？」

「俺の……俺の、兄だ」

その場の空気が変わった。

No.9 (後書き)

侵入者は成実の兄だった!?

次回、もう一つ乱入です。

TOAこと「TALES OF THE ABYSS」から、3人ほど。

誰かはお楽しみに。

テイルズオブは更に増やそうか思案中です。

でもこれ以上増えると書き分けが出来ない…

No.10 (前書き)

途中までですが後ほど最後まであげます

No.10

あと少しで夜明けという時間帯。

ドサドサと路地裏に物が落ちる音がする。

「いったあい！」

「全くだす」

「何でもいいが、早く降りてくれないか？」

落ちてきたのはぬいぐるみを背負った少女と眼鏡をかけた男性それに腰に刀を下げた青年。

少女と男性は青年の上に落ちたらしく、上の発言に繋がる。

「おや？居たのですか？」

「あれ？本当だ」

「…あのなあ」

降りつつもからかう様な少女と男性に対し、青年はため息を付きつつ立ち上がる。

「少し真面目な話になりますが、ここが何処なのかはつきりさせたいですね」

「確かにい。大佐、わかりますかあ？」

「いえ。全く見当もつきません。見たことのない町並みですし、二人はどうです？」

「ううん…わからないです」

「俺もだ。見たことがないな」

「役に立たない…」

「本当ですね」

「だから、何で俺だけそういう扱いなんだ！」

「さあ？」

「貴方だからですね」

「……………」

散々な扱いをされる青年。
そんな時。

「はうあー！！た、大佐！何ですかあれ！」

「わかりますん。ですが、少なくとも友好的ではありませんね」

目の前には狼に剣が生えたような生き物がいる。それも、三匹。

「どうやら、自己防衛をしなければいけなさそうだな」

グルルと喉をならし近づくを見て、青年が刀を抜く。

「全く、骨がおれますね」

男性もどこから取り出したのか、槍を構える。

「早速ぶっ飛ばしちゃうも…はわ!!」

背負ったぬいぐるみを地面に叩きつけた少女はまた驚きの声をあげる

「どうしました？」

「ト、トクナガが!」

彼女の手の中のぬいぐるみは今叩きつけられたことにより少し土がついている。

「仕方がない。アニス、下がってろ」

狼狽える少女の前に男二人が壁のようにたつ。
細い路地だったのが幸いして完全に道を塞ぐ。

「さて、行きますか。瞬迅槍!」

「虎牙破斬!」

互いに得物を狼に向け技を叩き込む。
しかし…

「おや?」

「効いてない、か？」

「何でそんなに冷静なの！！！」

冷静に呟く男性二人にバシバシとぬいぐるみを叩きながら少女はヒステリックに叫んだ。

「騒いだところでどうなる問題でもありません」

「そういうことだ。が、困ったな……」

「この際、ガイを生贄に」

「だからなんでいつも俺なんだ！！」

ふざけ始めた(?)男二人。その間に狼はどんどん間合いをつめてくる。

「どいて！！」

「よけて！！」

不意に合間を縫うように銀髪の少女が現れ上からは白髪の少年が飛び降りて三人の前の壁になる。
言うまでも無く、愁と雪兎である。

「貴方たちは誰です！？」

「後！^{あと}下がって！！」

「危険だぞ！」

男二人は少々驚きつつも愁と雪兎に言う。

もちろん、愁と雪兎は既に起動イグニッションしている。しかし、二人とも装備はヨーヨーだったり扇だったり彼らにしてみれば頼りなく見える上、能力者ということを知らない。体格的にも見た目的にも幼い二人。頼りなさ過ぎる。みただけでは。

「御願い、下がって？」

振り返ってコクンと首をかしげたる雪兎。しぶしぶながら、男二人も少しだけ下がる。

「わりい」

「…」

「遅い！」

「はわ！来るよ！」

蒼竜と成実が合流したところで狼は二匹が愁と雪兎、一匹が成実と蒼竜に襲い掛かる。

「…うざい、消えろ」

いつも以上に低い声でブツブツ呟きながら、成実は闇をまとった刀を叩きつける。

「童、任せる。…当たれ！」

童に指示を出し愁のほうへ向かわせ、自分は手のひらを雪兎に噛み付こうとした狼に向け雑霊を集めた気の塊を打ち出す。

「いつけえ！！」

跳び下がりざまに作り出した淡い青に輝く矢を自分に飛び掛つてきた狼に放つ愁。

「消えて！」

蒼竜の攻撃により体勢を崩した狼へ向け獣のオーラをまといヨーヨーを振り壁へと叩きつける雪兎。

叩きつけられた狼はそのまま消滅する。

「残数2」

「何だと！」

「おや？相当ですね」

低い声で呟く成実。

あんまりにも呆気なく消滅した事に驚きを隠せない男二人。

「雪兎は愁に協力！成実、あわせてくれ！」

「わかった！」

「了承」

槍を構えつつ指示を飛ばす蒼竜。それに答え愁の側へ行く雪兎、駆け出す成実。

蒼竜がその槍を振りぬくと狼はそれを避ける。その一瞬の隙に成実は懐へ入り込み手にした刀をクロスさせたまま振るった。

はさみの原理で首を切られた狼は一瞬血を噴くも消滅した。

ほぼ同時に愁がもう一匹へ矢を放つと雪兎は三日月の軌跡を描く蹴りを叩き込み狼を消滅させた。

「終了つと」

「で、あんたらは？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4174g/>

死と隣り合わせの...

2011年2月23日05時50分発行